

月刊
中東レポート
第 89 号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL. (03)3291-5533
編集 J.R.A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費24000円

- 帝国主義的「和平」をいつそう露骨に打ち出したクリントン……
資料……
・追放者たちの帰還まで闊いの拡大を（抄）
・一〇組織声明（抄）
・インティファーダ六五ヵ月目に際して（抄）
・パレスチナの経済——四八年被占領地（抄）
・ラビン＝クリントン会談について（抄）
・交渉の構造的危機
・特別レポート——追放者たちの現状
・被占領地の現状
・パレスチナの土地をパレスチナ人民へ！
重要日誌（一九九三年三月一日～四月一〇日）……
15

帝国主義的「和平」をいつそう露骨に打ち出したクリントン

一九九三年四月一〇日

—クリントン＝ラビン会談

クリストファーの歴訪時に強調した「米国は和平の全面的なパートナー」という点に警戒を示し、その明確化を中心目的の一つにして出かけたラビンは、（望むもののすべて、というよりも、期待以上のものを手に入れた。障害を取り除く代わりに、和平への新たな障害を設置した）とアラブ紙は表現し、「パレスチナ側にはまったく何も提供しようとなかった。メツセージは強烈で明快だ——イスラエルの提案に沿って討議に戻れ！」という命令以外にはなかつたし、シリアに対してもイスラエル提案の和平を呑めというものでしかない」と国際的な報道機関は表現した。クリントンとラビンの記者会見は、「通常の記者会見というより、両国の特別な関係を誇示するセレモニーと表現するしかない」とアッサフイール紙の特派員は吐き捨てるよう伝えてきた。

そんな帝国主義の「和平」という名前の露骨な支配に對して、人民の反対が高まるのは当然で、ワシントン・ポスト紙も「クリントンは和平への「真の一発」と豪語しているが、それは本当に当つてない」と評している。
今号では、こうした点に焦点を当ててみたい。
だが、選挙運動中に自らを「シオニストである」と宣言したクリントンは、口では「ランド・フォード・ピース」の原則を言いつつ、実態はア

もう少し、具体的に見てみよう。

クリントンは、和平への大きな障害と言われている追放問題に関して、「いや、われわれはそれを討議しなかつた」と答えたうえで、われわれはすでに「それに関して合意に至つた。私はそれが枠組みだと考える」し、それは「将来的にもわれわれの枠組みである」「われわれはペレスチナ側が（交渉の）テーブルに戻ることを強く希望する」と言つてのけた。

シリアとイスラエルの交渉に関して、クリントンは二つの重大なことを提示した。ラビンは、マドリッドの交渉形態（すなわち、アラブ諸国との包括的な交渉）に反対で、個別の交渉を主張しているのだが、クリントン政権はそうした個別交渉化の方向にゴーサインを出した。同時に、「国連決議に沿つた合意」を支持すると言いつつ、「それは完全な正常化、外交、国境の開放、通商、観光……そしてイスラエルの安全保障は確実でなければならない」とイスラエルの主張点をそのまま強調した。

他方、「戦略的パートナーシップ」に関して、クリントンは、「中東地域の危険性を縮小するため、イスラエルの（アラブ総体に対する）軍事的優位をいつそう確実にすることが可能なよう支援する」と語った。ホワイトハウスの説明では、「九四年度の（イスラエル援助）レベルを維持する」し、「大統領はその後もこうしたレベルを維持することに最大の努力を払うことを明確にしていく」だけでなく、「もし地域において本当に和平への突破口が開かれれば、そのとき米国はイスラエルに対して和平を創る

出させることである。それでも、米国が出すといふことでは変わりはないはずだが、湾岸戦争の時のように、呼び水だけやつておいたら、米国は利をえるカラクリ構造も用意されているのかもしれない。

さて、前号で紹介したイノウエや前述のリービといった親イスラエル派内からさえ懸念が表明され、米市民の間からはイスラエル援助が改めて問題になつてていることに対しても、どうするのか?というと、これは簡単である。ロシア援助におけるユダヤ資本のカラクリは、ロシア内の不安定を醸成し、イスラエルへのユダヤ移民を作り出すからであり、他方で、原理主義の脅威を喧伝し、イスラエルやエジプトの存在意義を強調すればいい（当然、ここでもユダヤ資本へと金が流れる構造）のである。

前者に関しては、クリストファーが議会での発言で、ユダヤ移民の入植を支援することを明確にした。なんど、「ユダヤ難民（！）に対する（入植）計画への財政的支援の継続的重要性と必要性」という表現をもつて。

他方後者に関してクリストファーは、例によつて、イラク、リビア、そしてイランを非難し、同時にアラブ・ボイコットは「まったく望ましくなく、正当化しがたい」ものであり、アラブ諸国は早急にこれを廢止すべきである、と語つた。これなら、まさに米企業＝ユダヤ資本の利益にかなうというわけだ。

四月初旬のムバラクの訪米は、和平の再開に向けた追放問題の解決ではなく、中心を「対テロ」を

1993年5月31日 第89号

クリントンは、和平への大きな障害と言われている追放問題に関して、「いや、われわれはそれを討議しなかつた」と答えたうえで、われわれはすでに「それに関して合意に至つた。私はそれが枠組みだと考える」し、それは「将来的にもわれわれの枠組みである」「われわれはペレスチナ側が（交渉の）テーブルに戻ることを強く希望する」と言つてのけた。

シリアとイスラエルの交渉に関して、クリントンは二つの重大なことを提示した。ラビンは、マドリッドの交渉形態（すなわち、アラブ諸国との包括的な交渉）に反対で、個別の交渉を主張しているのだが、クリントン政権はそうした個別交渉化の方向にゴーサインを出した。同時に、「国連決議に沿つた合意」を支持すると言いつつ、「それは完全な正常化、外交、国境の開放、通商、観光……そしてイスラエルの安全保障は確実でなければならない」とイスラエルの主張点をそのまま強調した。

他方、「戦略的パートナーシップ」に関して、クリントンは、「中東地域の危険性を縮小するため、イスラエルの（アラブ総体に対する）軍事的優位をいつそう確実にすることが可能なよう支援する」と語った。ホワイトハウスの説明では、「九四年度の（イスラエル援助）レベルを維持する」し、「大統領はその後もこうしたレベルを維持することに最大の努力を払うことを明確にしていく」だけでなく、「もし地域において本当に和平への突破口が開かれれば、そのとき米国はイスラエルに対して和平を創る

ためにリスクを負つたという支援を準備することになろう」という。

こうしたクリントンの全面的な支援をえたからこそ、ラビンは、イスラエルは妥協にやぶさかではないが、「妥協は一方的であつてはならない」、アラブ側はこの好機を逃すべきではなく、もしそんなことになれば次代のアラブ人、イスラエル人は「われわれを許さないだろう」と脅し文句を言い、さらには「私は、まもなく帰国するが、わが国の誰にでも、（イスラエルはホワイトハウスに友人を持っている）と言う」と発言したのである。

その援助に関連して、世界的な規模の問題に簡単に触れておきたい。

二 露呈したシオニストのカラクリ

バンクーバーで、クリントンは、一六〇億ドルあまりのロシアへの支援を発表したが、その際、「米国内には、対外援助に反対の声もあるのだが、これは米国の利益である」と語つた。そして、それは「嘘つき日本」（クリントン）などにより大規模な援助へと誘う呼び水であることを公然化した。

ところで、（昨年、西側の対ロシア支援は約一二〇億ドルの財政援助と約七〇億ドルの返済繰り延べなどの援助がなされた、が、そのロシアから約二〇〇億ドルの資金が流出した）、とIMFは発表している。

旧ソ連の時代から、巨大な支援に対して、ロシクフェラー帝国の陰謀であるとか、ユダヤ資本の対外援助）委員長が、三月三〇日、このロシ

アへの大型援助に関連して、（冷戦後の最大の問題に応じるために、イスラエル、エジプトへの援助を減らすべきであり、両国も米国とのそうち措置を支援するだろう。なぜなら、今年度の米援助は、総額で一四〇億ドルで、イスラエルには三〇億ドル（イスラエルの各人に年七〇〇ドル）、エジプトには二一億ドル、他方のロシアには四・一七億ドル（ロシア一人一人には年三・五ドル）の援助となつているからだ」と述べた。が、クリストファーは、「われわれは（ロシアへの）金をイスラエルやエジプトへの支援のなかに見いだそうとは考えていない」と答えた。

では、どうするのか？ 一つは、先にも述べた「嘘つき日本」をはじめとする先進諸国に出されることで、もう一方では、湾岸戦争で支援してやつたサウジ、クウェートなどの「恩知らず」のアラブ産油国（クリストファー）に

はじめとする協力関係に置いた。ペレスチナを含めたアラブ側を和平に引き出すために、F・フセイニ氏の交渉団入りを認めるというアメをちらつかせはした。が、中心は、アラブ・ボイコットの廃止やシオニストの完全なヘゲモニーの下での国交正常化といった方向を、アラブ諸国に押しつけることへのエジプトの協力にあつた。

シオニスト側は、単にラビンがシリアとの個別の和平への意欲を示しているだけでなく、その国際的な報道機関を利用して、シリアとはすでに「ゴランからの撤退と米軍の展開で話が進行している」とか、「シリアのト拉斯国防相をも含めた、軍のトップレベルの会談までなされている」とか、「シリアはペレスチナ建国に反対している」などといった二セ情報を次から次へと流している。

これに對してシリア側は、追放問題の解決の重要性を強調するとともに、単独行為を否定し、包括的な和平以外にはありえないことを繰り返して強調している。クリントン＝ラビン会談の前には、ダマスカスからはもちろん、アンマンからも、ベイルートからも、追放問題の解決が交渉の再開にとって非常に重要であり、それがなされなければ、アラブ側全体が交渉の延期な措置を求めることにならうという警告が出された。だが、こうしたアラブ諸国の一一致した意志は完全に無視され、交渉の枠組みそのもの

本の利益のための策動であるとか、言われている。今、米国内はおろか、ロシア内でも、援助に対する疑問の声が挙がっている。IMFの発表は、西側の大規模援助が、「米国民の利益」などではなく、ごく一部の巨大多国籍資本（それを、ロックフェラーとかロスチャイルドとか、ユダヤ資本と呼ばうとした違ひはなさそう）の利益でしかないこと、しかも長期的な利益云々の話ではなく、注ぎ込んだ以上の金がそぞした者の懷に流れ込んでいく構造であること、を、はつきりさせている。

親イスラエルの一人である、リーピ（議会の对外援助）委員長が、三月三〇日、このロシ

アへの大型援助に關連して、（冷戦後の最大の問題に応じるために、イスラエル、エジプトへの援助を減らすべきであり、両国も米国とのそうち措置を支援するだろう。なぜなら、今年度の米援助は、総額で一四〇億ドルで、イスラエルには三〇億ドル（イスラエルの各人に年七〇〇ドル）、エジプトには二一億ドル、他方のロシアには四・一七億ドル（ロシア一人一人には年三・五ドル）の援助となつているからだ」と述べた。が、クリストファーは、「われわれは（ロシアへの）金をイスラエルやエジプトへの支援のなかに見いだそうとは考えていない」と答えた。

では、どうするのか？ 一つは、先にも述べた「嘘つき日本」をはじめとする先進諸国に出されることで、もう一方では、湾岸戦争で支援してやつたサウジ、クウェートなどの「恩知らず」のアラブ産油国（クリストファー）に

味しない」と表現していた。

が、ヨルダンがパレスチナとの同一歩調を示し（これは前号で紹介した）、これを受けて、シリア、レバノンも、「彼らが参加しないこと」に決めたなら、われわれにとつても交渉への参加は難しい」（ダマスカス訪問時のハラウイ）レバノン大統領発言）という状況になつた。かつ、「ラビンは和平過程を活性化するためにではなく、米の軍事的、経済的、財政的な支援の継続の保証のために米へ行つた」（シリア・ラジオ）ことが明白なのだから、困難さは余計に大きくなるのは当然であった。

冷戦構造時代だつたら、そんな「和平」はきっぱりと拒否した。が、依拠するパワーバランスなど存在しない。それどころか、ロシアはアメリカ帝国主義のお先棒をかつていて参加をせつづくあります。米国は「招待したように四月二〇日からの交渉のテーブルに戻り、この好機をつかむことがすべての側の不可避なことである。もし、そうしなければ、中東の次代は終わりなき対立、戦争のサイクルのなかに忘れられる」（クリストファー、三月二三日）といった脅迫を何度も繰り返し、要は、「言うことを聞くか、さもなければサッダムの道か」と迫つてくる。そればかりか、シオニスト側は、「ノー」と言わせ、交渉から引き上げさせ（そして、戦争を仕掛け）るための策謀を次々と展開しているのが実情である。

ムバラクの訪米は、上述したように、なんら追放問題を解決するものたりえなかつた。ムバラクは、交渉のテーブルに戻り、この好機をつかむことがすべての側の不可避なことである。もし、そうしなければ、中東の次代は終わりなき対立、戦争のサイクルのなかに忘れられる」（クリストファー、三月二三日）といった脅迫を何度も繰り返し、要は、「言うことを聞くか、さもなければサッダムの道か」と迫つてくる。そればかりか、シオニスト側は、「ノー」と言わせ、交渉から引き上げさせ（そして、戦争を仕掛け）るための策謀を次々と展開しているのが実情である。

三五・五%、中学校以下が二五%である。統計では、八〇年の統計では、一二・五%が農業に従事していたが、九〇年の統計では、六・四%となつておらず、パレスチナの農業の縮小を示している。シオニスト擬制国家の建設以来、パレスチナの農業は縮小の一途をたどっているが、その理由は、①アラブ人の土地の没収（移民用の住宅建設、工業地域への没収、水問題における差別などを含む。*下注参照）、②農業の機械化、③他産業（とりわけ女性の衣類や烟包産業）への転職などが挙げられる。

農業が（部分的である）生活の根本という状況は確実に減少し、今や、ごく一部の地域の一部の家族のみが農業を生活の基盤としているに過ぎない。

一二・七%が工業に従事している。が、同朋のアラブ人の經營する工場は限定され、仮にアラブの投資家が大きな工場を建設しようとしたら、ユダヤ人地域の工業地域に魅かれる構造になつていている。アラブ人の地域では、特典が少なく、利益が見込めない。シオニスト擬制国家はアラブ人の産業振興など考えてもらえない。

同朋社会に、一定の工業は存在するが、家具製造や縫製といった室内工業がほとんど。他には、ブロック製造、大理石や石材、オリーブ油絞りで、以上が上位を占めている。

（クリントン）発言の最も危険な内容は、彼がイスラエルの和平概念を受け入れたことである。彼は、交渉の基礎、条件として新しい形態を探用した——決議二四二、三三八を基礎にした真の永続的包括的な和平を達成するためには、完全な国交の正常化、外交関係、国境の開放、貿易、観光などなどが重要、と。他方、彼は、イスラエルの撤退に関してもまったく触れようとしなかつた。

クリントンの新たなレベルでのイスラエルとの戦略的パートナーシップの強調は、安全保障とはイスラエルの安全保障しか意味しない。被占領地で殺害、脅迫、家屋破壊などの国際法違反をしているイスラエルを「輝かしい民主主義の好例」と表現するのは、アラブ世界をして冷戦の敗者として扱うということである。

あるいは、多分、新たな冷戦の準備宣言へと準備を、そこでの中心的な役割を要請したといふわけだ。

つまり、「中東はイスラムの支配へと向かっており、〈中東はイスラムの支配へと向かっており、

三五・五%、中学校以下が二五%である。統計の信憑性は別にして、四八年領内の同朋の教育水準は低く、収入を得るために中退＝就労する者が多いことが示されている。

2、職種

八〇年の統計では、一二・五%が農業に従事していたが、九〇年の統計では、六・四%となつておらず、パレスチナの農業の縮小を示している。シオニスト擬制国家の建設以来、パレスチナの農業は縮小の一途をたどっているが、その理由は、①アラブ人の土地の没収（移民用の住宅建設、工業地域への没収、水問題における差別などを含む。*下注参照）、②農業の機械化、③他産業（とりわけ女性の衣類や烟包産業）への転職などが挙げられる。

農業が（部分的である）生活の根本という状況は確実に減少し、今や、ごく一部の地域の一部の家族のみが農業を生活の基盤としているに過ぎない。

一二・七%が工業に従事している。が、同朋のアラブ人の經營する工場は限定され、仮にアラブの投資家が大きな工場を建設しようとしたら、ユダヤ人地域の工業地域に魅かれる構造になつていている。アラブ人の地域では、特典が少なく、利益が見込めない。シオニスト擬制国家はアラブ人の産業振興など考えてもらえない。

同朋社会に、一定の工業は存在するが、家具製造や縫製といった室内工業がほとんど。他には、ブロック製造、大理石や石材、オリーブ油絞りで、以上が上位を占めている。

農業や工業といった生産活動に従事しているのは、労働力の二八・一%、その多くはイスラエル産業で働いている。建設や第三次産業に従事しているのは一八・八%である。

3、結論として

統計は、四八年領内のパレスチナ人は、経済的な役割を果たしていないことを示している。そして、大多数は、シオニストどもが働きながら低い低賃金で、きたなく、きつく、かつ不安定な職種に就いている。統計は、四八年領内のパレスチナ人半数以上は貧困ライン以下、もしくはそれという生活条件下にいることを示している。

（*編注）四八年以降、町や村丸ごとのを含めた強制立ち退き、没収、周辺の「開拓」による居住不能状況の創出などが続出している。今、旧ユーゴで問題になっている「民族浄化」は、イスラエルの建国、それ以前の英國統治時代から行われている——ただし、ユダヤ人を民族といいうのは無理があることで、それゆえ彼ら自身

ラビン＝クリントン会談に関する（抄）

アッサフイール紙
三月一七、一八両日

アッサフイール紙、三月一七、一八両日

五〇%以上のアラブの町や村には、公認の工業地域はない。また、公認工業地域と言つても、三五%以上は小規模で、四五%は未発展で、道路、電気、上下水などが立ち退れているのが実情である。

同朋社会の産業構造は、基本的には、消費型業地帯はない。また、公認工業地域と言つても、三五%以上は小規模で、四五%は未発展で、道路、電気、上下水などが立ち退れているのが実情である。

アラブ人はユダヤ化した」と非難する傾向が強かつたが、この蜂起によって、パレスチナ革命のあり方を捉え返す契機にもなった。

また、文中のパレスチナ人、アラブ人、同朋は基本的に同義。

クリントンは、世界の変化にもかかわらず、ラエルの軍事力が優位であることの必要を宣言した。彼は、和平のためにイスラエルにそれなりの妥協を要請することすらしなかった。

クリントンは、世界の変化にもかかわらず、ラエルの軍事力が優位であることを語りながら、ワシントンとテルアビブの関係は変わらないという。これは、米＝イスラエル間の討議において、アラブの要素が完全に不在という、最初のことではなかろうか。米大統領は、あたかもアラブの存在などないかのごとく、自らの新しい立場を宣言した。これは、米が「和平の

ている、大衆的イスラム的な反対が増大している、それが米の利益に危険をもたらす」と見なしているがゆえに、それに対し準備が必要となるわけだ。ワシントンが、共産主義に代わる敵を探し、それをイスラムのなかに見つけた。そのなかには、歴史的に米と良好な関係を持つてきたものさえも含まれている。

中東地域の秩序維持のために、イスラエルが中心的な役割を、という米国の意志をイスラエルが遂行するのにどんな方法があるか……いずれにせよ、湾岸戦争後にブッシュが望んだ地域の安定とは違った米国の外交展開を、テルアビブは創出しようとするだろうし、クリントンはそれを承認するというわけだ。

そしてここにもクリントンがマドリッドで開始された和平過程に終止符を打つことが示されていると言えよう。

クリントンの新たなレベルでのイスラエルとの戦略的パートナーシップの強調は、安全保障とはイスラエルの安全保障しか意味しない。被占領地で殺害、脅迫、家屋破壊などの国際法違反をしているイスラエルを「輝かしい民主主義の好例」と表現するのは、アラブ世界をして冷戦の敗者として扱うということである。

あるいは、多分、新たな冷戦の準備宣言へと準備を、そこでの中心的な役割を要請したといふわけだ。

クリントンは、イスラエルに圧力をかけることなく、和平過程を保証する米国の効果的な役割の必要性を強調した。クリントンは、アラブ側への「妥協」の催促を試みた。これはアラブが古くから見てきた國ではなかつたろうか？

交渉団長シャフィは、米国に必要なのはイスラエルに決議二四二を遵守させることだ、と明確に語った。圧力をかけるべきは交渉に障害を作っているイスラエルに対してなのだ。イスラエルが包括的な解決の用意があると言うことは、決して新しいことではないし、その中身はパレスチナ側には受け入れ難いこともはつきりしている。イスラエルは公正な和平の達成を保證するために妥協することなどまったく意図しま

してはいないからだ。

交渉の構造的危機

N・ハティビ（アル・バラード報道機関、責任者）、アル・シャープ紙、三月一五日

クリントンの訪問は、中東の頂点に達した。過程はその危機の頂点に達した。過程に関与している政治家たちは、過程が開始された基礎、その失敗の根拠、さまざまの障害のゆえの停止などを思い起こすよう呼びかけていたが、それだけだし当然といふものであろう。

クリントンはあらゆる機会に米国は「和平過程の全面的なパートナー」となることにや

三五〇平方キロの地域に七五万とも一〇〇万とも見積られる、人口過密の回廊の中心地ガザ市内のUNRWAの事務所で、同職員のポロツクは語つた。

国連は人口の一・二%を占める四八年難民に食糧供給を行つており、もし国際的な拠金があれば、さらに八%がその対象になる。

八七年一二月にジャバリア・キャンプで始まつたインティファーダの開始以来、ガザの経済は下降の一途をたどつてゐる。ガザ住民がイスラエル内で働き、イスラエル側がガザの生産物を購入するという関係は即刻縮小し、九一年の湾岸戦争でそれはさらに加速された。

PLOがイラクを支持したことから、アラブ産油国がPLO經由の援助を停止し、家族への活動ある送金源であったパレスチナ人労働者を追放した。加えてイスラエルによる規制の強化。インティファーダの前には日に八万の労働者がイスラエルへと往復したが、湾岸戦争時には五六〇〇〇に、現在は三万へと減つてゐる。

の日本人に対して一四六六人が慰問した。
こうした実情、桁外れな貧困が、一二月の由
旬以来すでに約四〇人近くのパレスチナ人と六
人のユダヤ人入植者が死亡しているガザの背景
にある。

獄中にも「協力者」（裏切り者）を植え付け
A.F.P. 三月一一日
パレスチナ人の獄中経験者が語つたところによると、イスラエルの諜報機関は、獄中にも、「協力者」（＝裏切り者）を植え付け、拷問を伴う尋問でも口を割らないパレスチナの容疑者から、供述をひきだしている。

人民の闘いの激化のなかでラビン政権内からもガザからの一方的撤退論が出ている。これは強硬派シオニストを刺激した。彼らは地域を保持すること、約三〇〇〇人の入植者を守るだけでなく、より皆化した入植地とその人數の拡大を主張している。

もしイスラエルが突然に撤退したなら、ガザの経済は完全に破綻してしまうだろうと言われば、他方それは、いつそうイスラエルを脅かされ、深刻な不安定を創出するとともに、ガザ内での流血の権力争いをも引き起こすことになろう、とも言われる。援助機関、ガザの人、イスラエル人に共通する数少ない見解の一つだという。

だが、産業協会の会長、M・ヤズジは、「彼らが撤退したがっている？」それはわれわれの要求ですよ。今や撤退に解決を見いだすかどうかはイスラエルの責任です」と言う。

明したが、時すでに遅く、最終的に彼は四年間の投獄を言い渡された。「私はトリックに引っかかってしまった。でも、数週間に渡る尋問」¹の拷問の後に、他の同囚が信用してくれることの必要性を感じたとしても不思議ではないでしょう」と彼は語った。

ンベトに、手なすけられた連中である。ガザ出身で二六歳のS・シャーバンは、八九年に逮捕された。「私は、ガザの軍刑務所での尋問で拷問の際に、内出血を起していました」当局から、「医療刑務所へ行くことになるだるうが、とりあえずこここの房に入つておれ」といふことで、八人いる房に入れられた。「奴ら(=同囚)は私に、自分たちは終身刑を受けたインティファーダの指導的な者たちであると言い、私がなぜ投獄されたのかを聞いてきました。私が何もやっていないと答えると、奴らは私を「暴力者」「裏切り者」だと決めつけ、暴行を加えてきたのです」、「裏切り者ではないことを示すために、私は私のコード・ネームと、活動について話しました。すると奴らは、信用するためにもそれらを文書にせよ、と要求してきました」、「まだ、奴らの正体が判つていなかつた彼は、その要求に従つた。すると、翌日、当局は彼の自書を提示して見せた。ここで、奴らの正体が判

1993年5月31日 第89号 月刊 中東レポート

特別レポート　近旅者たちの現状

彼らパレスチナたちが「無人地帯」に追放されてからすでに一〇〇日を越えた。雪に覆われていた土地にも花が咲き、かれらの生活条件はかなり改善された。自然条件だけではなく、「村民」たちの支援による物質的な面でも、そしてなによりも、パレスチナ人民の闘いにおける精神的な面でも、そうである。

しでも歩けるようになった。寒風のなかで、眠れぬ夜を過ごした時に比べて、全員の健康状況も確実に良くなっている。

「われわれがここに永くいればいるほど、イスラエルの状況は悪化していく」と、全体のスパークスマントをつとめるランティスイは語った。

大学教授のオウエイシも、「今までのところ、これはわれわれの勝利です。物資の供給はまったく問題なく、政治面でも良い方向へ向かっています」と言う。「だが、家族の問題はあります。われわれは次代がより良い将来を持ってることを期待しているのですが……」と、家族のこ

二九歳でホテルで働いていたというN・H・デは、九回も投獄の経験がある。「獄中は、私には自然なことになりましたよ。でも、ここは一〇〇日も経つても、そらはならないな」と言いながら運動だといって、山道を登り下りしていた。

三月一七日、追放から四カ月目を迎えた彼は、帰還のデモを展開し、イスラエルがすべの国連決議を遵守すること、パレスチナ代表団はパレスチナ人民に敵対的な交渉から撤収することを要求し、国連のあり方が不公正そのものであり、その「信用は地に落ちた」と国連マーケのテントを焼いた。被占領地ではゼネスト、ペイルートなどでは、被追放者たちに呼応して国連事務所へのデモが展開された。

同二五日には、多くの家族がイスラエル北部へ終結するというニュースが伝わり、彼らも遼デモ。パレスチナの子供たちへむけた、ラマダン正月のメッセージを付けた、風船を飛ばした

被占領地の現状
（その1）
ガザ、鬪いと貧困

このように、交渉の行き詰まりは、交渉そのものの構造的な欠陥と関連している。シャフイが問題にしたのは交渉の構造そのものである。交渉の成功のためには必要条件を改革していく以外になく、それこそ交渉の袋小路からの打開の唯一の責任なのだ。が、果たしてクリストファーはそれを提示したと言えるであろうか？。

となると言葉を詰ませた。
他方、医療団の団長〇・フェルワナは「勝
と言えるかね。なにしろ、われわれはここに
〇〇日以上もいるんですからね」と言いつつも
「でも、われわれだけでなく、パレスチナ人に
アラブ＝イスラエル問題全体に、なにか肯定的
なことが起こっているのは確かです。何も持た
ないで追放された四〇〇人がイスラエルを圧
し、国際的な関心を喚起しました。そして、
レスチナ人民に新たな精神を付与したのです」

デモ、西岸、ガザそして各地の「難民キャンプ」でゼネストが展開され、それに呼応して彼ら、デモ。すべてのパレスチナ人の一体性を強調した。そして、四八年領内のハイファ＝テルア＝ブルの中間地点で警官一人が射殺されたというニュースが伝わったとき、彼らの全員が「アラーム・アクバル（アラーは偉大なり）」と歎声をあげた。彼らのなかに、若干の矛盾が起つた。三月九日のエルサレム・デーをめぐって、イスラミック・ジャーディーがデモを提倡したが、ハマス側は

レバノンに追放されたパレスチナ人たちは、追放された地マルジ・アツズホールをモハイヤム・アルコッズ（エルサレム・キャンプ）と呼び、解放の根拠地に変えていました。彼らは解放の闘いのシンボルとなり、妥協を拒否し、全員の一括帰還を要求し続けています。私たちも彼らの要求を支持し、一刻も早く全員が一緒にパレスチナに帰還するための闘いに連帯します。

状況は日増しに厳しさを増しています。それゆえにこそ、パレスチナ人民はさらに激しく闘い続けています。困難な状況にある今こそ、私たちはパレスチナ人民の民族主権の実現の闘いを支持、支援します。

パレスチナの土地をパレスチナ人民へ！
パレスチナへのパレスチナ人民の帰還を！
イスラエルの略奪と弾圧に制裁を！
インティファーダに連帯し、団結し、自らの闘いを！

日本＝パレスチナ人民連帯の発展を！

一九九三年三月三〇日『日本軍赤軍』

三月一日
重 要 日 誌
一九九三年三月一～四月一〇日

- ・ガザ、人民の闘い。軍への銃撃。他方、入植者による乱射など。
- ・カドウミ、一、二回はパレスチナ抜きの参加もあります（本文参照）。
- ・南部、レジスタンスの攻撃。

重要日誌

三
三

レバノンに追放されたパレスチナ人たちは、追放された地マルジ・アツズホールをモハイヤム・アルコッズ（エルサレム・キャンプ）と呼び、解放の根拠地に変えています。彼らは解放の一括帰還を要求し続けています。私たちは彼らの要求を支持し、一刻も早く全員が一緒にパレスチナに帰還するための闘いに連帯します。

状況は日増しに厳しさを増しています。それゆえにこそ、パレスチナ人民はさらに激しく闘い続けています。困難な状況にある今こそ、私たちちはパレスチナ人民の民族主権の実現の闘いを支持、支援します。

パレスチナの土地をパレスチナ人民へ！
パレスチナへのパレスチナ人民の帰還を！
イスラエルの略奪と弾圧に制裁を！
インティファーダに連帯し、団結し、自らの闘いを！

日本＝パレスチナ人民連帯の発展を！

1993年5月31日 第89号 月刊 由東レポート

「彼らは、新入りを殴る、スプレーを熱してやけどさせる、ほうきの柄でオカマを掘るなど脅かす、などなどの暴力と脅迫手段を用いる」と彼は語った。

M・サイード（二四歳）は、九〇年にガザで逮捕された。数週間の尋問＝拷問に口を割らなかつた。当局は彼をイスラエル内の獄へと移送した。その道中、射撃音が聞こえた。獄吏は彼にパレスチナ人との撃ち合いがあつた、車が損傷したと伝えた。そして、彼は別の車に移されたが、その車には他に一人の囚人が乗つていた。「われわれはその後ベルシバの刑務所の同じ房に入れられた。一人はペイルートからだと」言い、もう一人は海上で捕まつたのだと言つた。奴らの全員が、裏切り者を殴つたので移されたのだと語つた。そして、サイードに銃をどこに隠したのか教えれば、ファタハの者がそれを回収すると言つてきた。「私は何もしゃべらないかった。すると奴らは剃刀を取り出し、私をめつた切りにすると脅してきた」

国際赤十字は、イスラエルに対し、こうした問題についても抗議をしてきたが、他と同様なんら役に立つてはいない。

パレスチナの土地をパレスチナ人民へ！
パレスチナの地へパレスチナ人民の帰還
を！　—パレスチナ「土地の日」に—

日本の人民、友人、同志のみなさんへ
四五人のパレスチナ人がレバノンに追放され
て一〇〇日を越えました。

この間の出来事はシオニスト・ラビン政権の本質をあらわにしています。ラビンは「鉄拳政策」の張本人です。しかし、パレスチナ人民に対して、彼らの土地を奪い、職を奪い、家を破壊し、人権と命を奪う恐怖政治は、パレスチナ人民の解放の意志を弱めることはできません。ガザをゲットー化し、封じ込めようとする政策は、ガザを解放の拠点にしてしまっては、アメリカのクリントン政権はイスラエルに対して露骨な支援をしています。「新世界秩序」とは、イスラエルのパレスチナ人抹殺政策の全面支援を意味しています。米国務長官のクリストファーはイスラエルがアメリカの戦略的な同盟関係にあることを公言しています。アメリカは中東和平会議をイスラエルの自論見を実現する場にしようとしています。国連はイラクやセルビアや朝鮮民主主義人民共和国の人権や核を問題にして即制裁をしようとするのに、なぜイスラエルのパレスチナ人に対する人権じゅうりんや追放措置や核保有に対して、問おうとしないいし制裁もしようとしないのでしょうか？それは、まさにクリントン政権がイスラエルの言いなりとなつており、国連はアメリカの言いなりになつてゐるからです。

日本政府は、アメリカの財政的な肩代わりの度合いを強め、他方でアラブ側にアラブ・ボイ

コットの解除を迫り、露骨にイスラエルに対する経済協力、経済プロジェクトを推進していく。それは、経済的にもイスラエル・アメリカがアラブを支配する構造を創り出すものです。

私たちは帝国主義諸国の「パレスチナ問題解決」に反対します。

シオニスト・イスラエルは、外のパレスチナ人に対しては帰還の権利を奪い、旧ソ連からの移民をアメリカから受けている援助金で財政的保証をし、他方で内のパレスチナ人に対しては土地を奪い、家屋を破壊し、職を奪って、ユダヤ移民に対して入植地を保証しています。イスラエルのいう「パレスチナ自治」とは、こうした現状をなんら変えるものではなく、むしろ現状を固定するもの以外の何ものでもありません。つまり、ガザや西岸に封じ込め、民政レベルの自治権しか認めず、パレスチナ人がパレスチナ人を、イスラエル中央政府の指示を実現していくために統治するということです。そのうえ、すでにあるユダヤ人入植地はイスラエル中央政府の直轄です。「自治」とは人民主権とはほど遠いものです。そして、四八年に占領されたパレスチナ人たちにとって、イスラエルのいう「自治」とはパレスチナ人として生きることの放棄を強いられるということです。「パレスチナ問題は解決した」と。それはパレスチナ人がシオニスト・イスラエルの奴隸として生きていくに等しいのです。私たちはパレスチナ人の人として生きる主権と民族的統一を求める総意を支持、支援します。

・イスラエル、兵の射殺体。ガザでは入植者を殴殺。
 警察相、拳銃携帯勧告（本文参照）。

三月一三日

・西岸、三歳の少女射たれて（翌日）死亡。
 ハラウイ、ダマス訪問。パトヨルダンが参加しないなら、交渉参加は難しい（本文参照）。

三月一四日

・被占領地、人民の鬪い、六人負傷。

・ベリー（七八年の南部侵略一周年に際し）、二回の侵略もイスラエルに安全を保障しなかつた。レジスタンスはイスラエルの目的を失敗させた。

三月一五日

・西岸、入植者二人を車でひき殺す。イスラエル内で、ナイフ攻撃。他方、人民の鬪い、ガザで一二人負傷。

・アブ・ジャベル、追放問題は和平にとって大きな障害。

・ラビン¹¹クリントン会談（本文参照）。

三月一六日

・人民の鬪い、二人死亡八〇人以上負傷。
 シリア、ラジオ、ラビンは、和平のためではなく、軍事的経済的支援要請のために、米へ行った（本文参照）。

三月一七日 追放四カ月目

・人民の鬪い、ガザで八七人負傷。西岸で、入植者がガソリンスタンドに放火など。
 追放者、デモ、国連を「暗黒の象徴」と非難。ベイルートで呼応デモ（資料参照）。

・南部、レジスタンスの攻撃。

・アサド、シリアは単独行為はしない、和平は全体

三月一八日

・人民の鬪い、二人死¹²、五三人負傷。

・PLO、わかれらが人民への国際社会の保護措置の実行を呼びかける。

・ハマス、攻撃のエスカレート、とりわけ西岸への圧力の移行を呼びかけ（本文参照）。

・南部、レジスタンスの攻撃。

三月一九日 エルサレム・デー

・岩のドームへ約二〇万人。
 南部、レジスタンスの攻撃三つ。

三月二〇日

・人民の鬪い、二人死亡。軍への待ち伏せ攻撃二つ、一兵士死亡。他方、軍は九家屋を破壊。

・南部、レジスタンスの攻撃。

三月二一日

・ガザ、検問へ銃撃。人民の鬪い、二人死亡二一人負傷。西岸、軍用車への銃撃、兵一人死亡一人負傷。
 イスラエル閣議、軍の増強など決定。しかし、悲観的な発言相次ぐ（本文参照）。

三月二二日

・エルサレム、高校でのナイフ攻撃、六人負傷。ガザ、人民の鬪い、三人死¹³。
 ラビン、ガザを訪問（本文参照）。

三月二三日

・人民の鬪い、一人死¹⁴。他方、入植者がパ人を縛つたうえ、銃を乱射して殺すなどユダヤ人内の「ピステリー」状況拡大。

・アラブ諸国、安保理に被占領地の問題を提訴、しかし、また無視された。

・南部、レジスタンスの攻撃、SLA三負傷。他方、SLA、一六人の捕虜を釈放。

送り。本文参照)。

三月二十四日

・人民の鬪い、西岸で一人、ガザでも一人死亡。カーラマン、一時拘束さる。

三月二十五日

・ガザ、収容所の兵士へのナイフ攻撃。軍に射殺され、近くにいた二人も負傷。

・シャフィ、家屋破壊、死傷者数など軍の蛮行を非難。

・アシュラウイ、PLOはガザでの責任を云々して居るが、われわれは反対。全面的な撤退を求める。

一方、イスラエル内にはガザからの一方的な撤退の声がさらに増大。

・追放者、ズムラヤ検問へのデモ(資料参照)。

・リクード、党首にネタニヤフ。

・ハズバラ、SLAの捕虜一人、一死体を引き渡し。

三月二六日

・ガザ、またロケットでの家屋破壊。別の家では追放者の一人の父と夫人を逮捕される。

・シャフィ、現状では交渉に戻ることは困難。他の諸国が参加の可能性はある。が、これはアラブの関係悪化にはならない。

・フセイニ、クリストファーと会談。

三月二七日

・アサド、エジプト訪問、アラブは一つの民族、單独取引の拒否を強調。

三月二八日

・ガザで入植者一人殺す。西岸では軍用車への銃撃、兵一人死亡。エルサレムでナイフ攻撃=負傷。各地で人民の鬪い。

・アラブ参加国外相会議(二日間、しかし、決定先

人死亡=二人負傷。悲劇? 喜劇?

ガザでは一五歳から四〇歳の男全員を拘束、大捜索・逮捕、以後連日。

四月三日

・PLO、ラビンはパ・人民への全面戦争を展開。

数の国がそうしたイスラエルの犯罪にカバーを与えている。

・南部、レジスタンスの攻撃、ゲリラ二人とSLA

一人死亡、イスラエル兵二人負傷。

四月四日

・シャフィ、招待を受け入れえない。なんら新しい提案も進展もない。

・ブエズ、公正な調停者たらんとすれば、イスラエルの戦略的同盟者たりえない。われわれはアラブ内の分解を受け入れない。

・南部、レジスタンスの攻撃、イスラエル兵四人負傷。

・アッディヤール紙、米は産油諸国に対レバノン援助を①和平への全面参加(多国交渉)②シリア軍の撤退を条件とするよう圧力かけている。

四月六日

・ムバラク=クリントン会談(本文参照)。

四月八日

・イスラエル刑務所、ファタハ・メンバー殺される。

・ムバラク、和平を再開しなければ、アラブは大きな損。

四月九日 インティファーダ六五[カ月]目

・被占領地や各地のパ・キャンプでゼネスト、人民の鬪い。

四月一〇日

・クリストファー、入植活動は難民対策であり、支

援継続が必要。アラブ・ボイコットは不当。産油

国はロシア支援を(本文参照)。

・ハツダム、アラブ領からの完全なイスラエルの撤退とパ・人民の民族的権利の承認、包括的、恒久的な和平を強調。「全面的なパートナー」なるものは米国の対応の中で判定される。